

3. 富山県富山市立中央小学校

持続可能な社会づくりのための教育を目指して

～富山市立中央小学校におけるE S Dの取り組み～

1 本校におけるE S D 2年目の取り組み

昨年度は、教職員も子どもたちも試行錯誤しながら取り組んだ一年であった。E S Dを推進していくにつれ、子どもたちや子どもを取り巻く大人の姿に以下のような変化が見られた。

体験を通して自然の豊かさや生き物の命を大切にしようとする心が育つ。
自然とのかかわりや人とのつながりを大切にしようとする心が育つ。
自分たちでできることを考え、実践するたくましが身に付く。

しかし、課題も見えてきた。

- ・ 全教職員による共通理解の場の設定の必要性
- ・ 1年間を見据えたストーリー性のあるカリキュラムづくりの見直し
- ・ 学年間のつながりを構築する手段や方法の形成

そこで、以下のような取り組みを試みた。

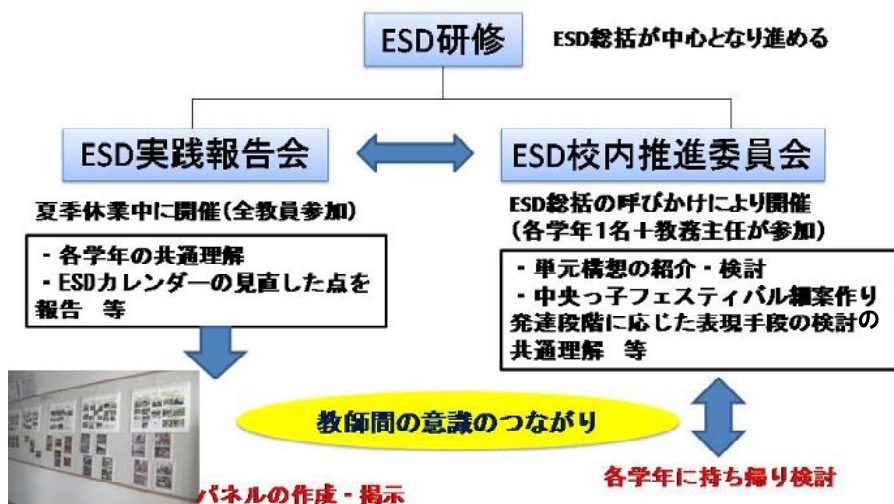
(1) E S D総括を中心とした校内体制づくり

本校では、校務分掌にE S D総括を位置づけている。E S D総括は、E S Dに関する研修会の計画・運営や外部機関との連絡調整を行っている。昨年度は、学年間をつなぐコーディネーターの役割として、各学年でどのような取り組みを行っているかを把握し、活動の相談に乗ったり、重なりが出てこないように連絡調整を行ったりしていた。

しかし、今年度は全教職員が共通理解する場を定期的に設ける必要があると考え、組織

として『E S D校内推進委員会』を設置した。

また、今年度は子どもたちともE S Dについての共通理解を図った。「自然にやさしい 人にやさしい 地球にやさしい」を『中央っ子E S Dの合い言葉』として位置づけ、E S D総括の資料をもとに、全学年に説明を行った。



(2) ストーリー性のあるカリキュラム作り

E S Dカレンダーからは、1年間の活動の流れは理解できるが、活動のどの場面で子どもたちにどんな力をつけたいのかは見えてこない。教師は、子どもたちに、学習のどの場面でどのようなことを学ばせたいのか、その構成「ストーリー」を考え、全体の流れを組み立てている。今年度は、それを学習構想図(P 3、P 9参照)として表すことにした。生活科や総合的な学習の時間を中心として、教科との関連を明確にし、ストーリーを目に見える形にし、随時加筆・補充していくことにした。

(3) 中央っ子フェスティバルの開催

E S D校内推進委員会で、発達段階に応じた取り組みと育てたい力の明確化について話し合い、年に1回は、全児童が参加するE S D活動報告会を行うことにした。中央っ子フェスティバルと名付け、E S Dカレンダーにも位置づけた。半年間の活動を見つめ直し、一人一人が思いや考えを発信する中間発表を考えた。初めての試みなので、相手意識・目的意識をはっきりとさせることから、1つ下の学年(1年生はお世話になった6年生に伝える)に伝える場として設定することにした。

2 ESD 2年目の取り組み実践例（第2学年・第5学年）

第2学年 生活科

自分の思いや願いをふくらませ、身近な人々や自然とかかわりながら、主体的に活動する子どもの育成

1 単元名 そだてよう！マイやさい

2 単元の目標

- ・ 野菜の生長を楽しみにしながら、野菜に親しみをもって世話をしようとする。
- ・ 野菜を育てるために、環境や世話の仕方を工夫したり、野菜の生長の様子や自分の取り組みを絵や文などで表現したりすることができる。
- ・ 野菜を大切に育ててきた自分や野菜の世話ができるようになった自分に気付くことができる。

3 単元について

児童の実態

- ・ 子どもたちは、1年生で、アサガオを育て、日々の生長を楽しみながら、世話をした。たくさんの花を咲かせ、種を収穫できたことで、植物を育てる楽しみを味わってきている。
- ・ 話し合い活動では、友達の考えを聞き合うことを大切にしたいと考えている。友達の発言に似ていたら、付け加えて発言したり、わからないことを尋ねたりしながら、少しずつ子ども同士のかかわりが生まれ始めているところである。
- ・ 本単元では、自分で野菜を育てる活動に取り組む。自分の力で工夫して野菜を育てようとする姿を大切にすることで、野菜への親しみを持ち、世話をする楽しさや収穫の喜びを実感できる子どもの姿を期待している。

教材の特質

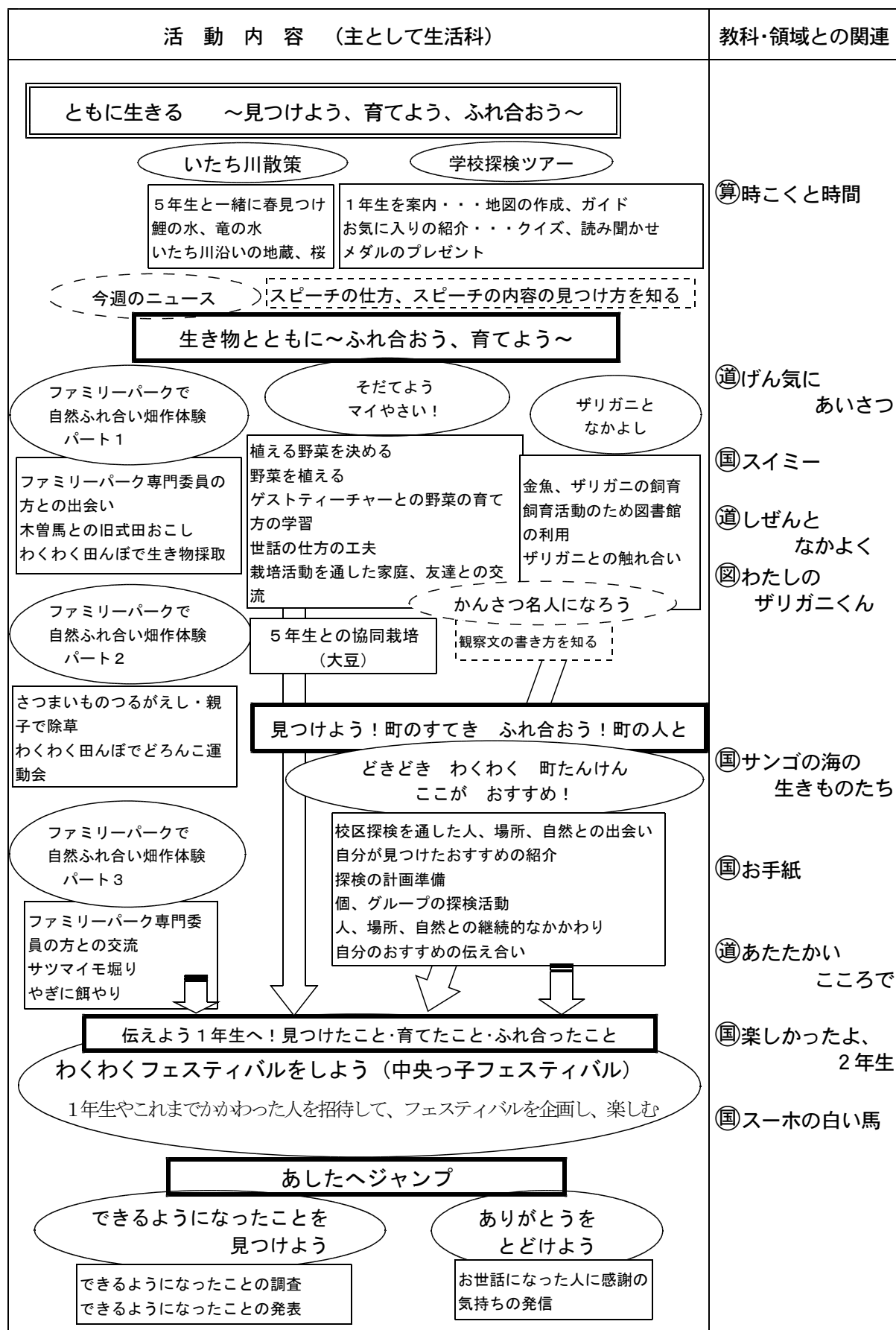
- ・ 野菜は、生長する喜びを感じ、収穫し食することができる魅力的な植物である。
- ・ 単元名を「育てよう！マイやさい」とした。マイには、MY=自分の野菜という意味と『毎日、世話をしよう』という願いが込められている。子どもたち一人一人が、自分で育てたい野菜を大きく育て、わくわくしながら収穫をめざす。
- ・ 畑ではなく、一人一鉢で栽培することにより、「マイ野菜」という意識を強める。鉢で育てるよさは、日当たりや雨、気温を考慮して容易に移動ができることにもある。子どもがこれらの条件を考慮して、世話の仕方を工夫できる。また、自分の野菜に名前をつけ、愛着をもち、温かい気持ちで世話ができるようにする。
- ・ 子どもたちが、自分の手で栽培する中で、病気や害虫などの障害に突き当たることもあるであろうし、世話をした分ぐんぐん育っていく喜びを感じることもあるであろう。自分が一生懸命世話をしているという実感とともに、命あるものへの愛情が育つと考える。

支援・指導の工夫

- ・ 子どもたちが世話をしている気がついたことを「やさいカード」に書きためていく。カードは、見つけたこと・うれしかったことをピンクカード、困ったこと・心配なことはブルーカードとする。小さめのカードを用意することで、小さな変化でもすぐに気軽に記録できるようにする。
- ・ 野菜の様子をチェックし野菜の健康観察表にシールで表すと同時に、自分の気持ちを色で表す項目を設け、一覧表で掲示し、学級全体で共有していく。
- ・ 子どもたちが、野菜の世話をしていく中で、友達の取り組みや考えに触れることができるように話し合いの場を設けていく。教師は何を問題にすれば、子どもの思いが深まるか、活動が継続できるかを考えて、話し合いの場を設定していきたい。長期的な活動になるので、節目節目をとらえて全体または小グループでの情報交換の場を提供していきたい。
- ・ ゲストティーチャーとして野菜作り名人の方との交流の場を設定する。話を聞いたり、質問したりすることで、自分の野菜の世話の仕方を見直したり、新たな気づきを見いだしたりできると考える。
- ・ 本単元と並行して、富山市ファミリーパークでの自然体験・畑作体験（わくわく田んぼ・サツマイモ作り）を年3回（5，7，10月）行う。里山の自然を全身で感じる活動を本単元と同時に展開することで、ダイナミックに自然とのかかわりを深めていきたい。

4 学習構想図

「ともに生きる ～見つけよう、育てよう、ふれ合おう～」 学習構想



5 指導の実際と考察

(1) 具体的な活動や体験を通し、子どもの思いや願いを大切にした単元構想の工夫

① 思いや願いを膨らます教材との出会い

子どもたちに「そだてよう！マイやさい」と単元名を提示した。「マイやさい」のマイは、どんな意味なのかを子どもたちと話し合った。「マイは、myで自分の野菜ということだよ。自分で育てるということだと思う」「毎日お世話をするのマイだと思う」といった意見が出された。自分で決めた野菜を毎日世話し、自分の力で育てるということを共有化することができた。また、日当たりや気温等一人一人の願いに応じて移動できるように一人一鉢で育てることとした。

自分の育てる野菜については、家族と相談したり、学級で話し合ったりしながら決めていった。鉢で育てられることを考慮し、育てたい野菜を決めた。愛着がもてるように、野菜には名前をつけ、毎朝様子を見て、健康観察を行うこととした。子どもたちは、野菜を収穫することを楽しみに、「おいしくなってほしい」「大きくなってほしい」といった願いを膨らませながら、毎日の世話をしていた。

このように、野菜との出会いを工夫することで、子どもと野菜との距離が近づき、育てようとする意欲を高めることができた。



＜こんなふうに育ってほしいな＞



＜パプリカの観察をするK児＞

② 気付きの質を高める話し合い

野菜は、葉が増え、茎が伸び、小さな実をつけるなど、日々生長していった。子どもたちは、小さな変化にも気付き、喜びを感じながら育てていた。また、日当たりによって植木鉢を移動する、支柱をたてる、声をかけるなど世話の仕方にも工夫が見られるようになってきた。そこで、生長の喜びや世話の仕方を話し合う学習を位置づけた。

＜中略＞

- | | |
|-----|---|
| T | 今、マイ野菜にどんなお世話をしていますか？ |
| C 1 | 早く咲いてほしいから、つぼみのところに水をやっています。 |
| T | 水やりの工夫をしているのね。 |
| C 2 | ぼくは、縦からも横からも斜めからも水をやっています。全部に水がかかるように・・・ |
| C 3 | わたしは、日曜日は水をやれないから、月曜日と金曜日はいっぱいやっています。 |
| C 4 | 農家の人がトマトはたまにだけやったほうがいいと言われたから、金曜日だけにしています。 |
| C 5 | ぼくは、土が乾いたらやっています。あげすぎると根腐れするって聞いたから・・・あげすぎもいけないし、水をやらないのもだめだから。 |
| C 6 | 晴れだったらやるけど、雨だったらやらないことにしています。 |
| T | C 6君は、何を見ているの？ |
| C | 天気 |
| C 7 | どれくらい水をあげたらいいかわからないんだけど・・・ |

水やりの仕方だけでも、随分違うことが話し合う中ではっきりとしてきた。C 7児は、「どのくらいあげたらいいかわからないんだけど・・・」と不安な気持ちを出してきた。話し合うことで、友達と比較でき、違いが明確になった場面である。このことにより、「水のやり方にもいろいろあるんだな」「自分の野菜にはどんなやり方がいいのだろうか」と気付きの質を高めていくことができた。また、「本当にこのまま自分の世話で大丈夫なのだろうか」という新たな課題を生み出していった。

マイ野菜がみんなうまく育っているわけではない。葉っぱに虫がつき始めた子どもや白い斑点（うどんこ病）が出てきた子どももいた。虫がつき始めたH児は、授業の中で「ちょっと心配です」と、実際のなすの鉢をもってきて実物投影機で写し、みんなに話した。

ズームアップしていくと小さな虫が葉についているのがクローズアップされた。見ていた子どもたちは、「わー、アブラムシじゃない?」と声を上げた。「米のとぎ汁をかけるととれるって2組の友達が言ってたよ」「水で洗い流せるよ」とH児にアドバイスをする子どもたち。アドバイスをもらったH児は、授業後に早速水で丁寧にアブラムシを洗い流していた。



＜アブラムシを洗い流すH児＞

③ 活動を支え意欲を高めていったゲストティーチャーからの学び

水やりのこと、虫のことなど、今のまま育てていても大丈夫なのかという気持ちが出てきたところで、野菜名人の竹中さんをゲストティーチャーとして招いた。子どもたちの問題意識は高く、土のこと、太陽のこと、水やりのこと、虫対策のことなどについて専門的に教えていただき、真剣に聞いた。

マイ野菜にアブラムシがついていたH児は、竹中さんに鉢を見せて「アブラムシが少しついているのですが、大丈夫ですか?」と尋ねた。「ちょっとくらいアブラムシがいても大丈夫だよ。牛乳スプレーをしてみるといいよ。いいナスができそうだね」と言われ、ほっとした様子であった。



＜ゲストティーチャーに教えてもらったよ＞

ゲストティーチャーの方は、子どもたちの質問にわかりやすく答えてくださったり、「このトマトは葉っぱがたくさん茂りすぎているから取った方がいいね」「上手に育てているね。バッチリだよ」などとアドバイスや励ましの言葉をかけてくださったりした。そのことにより、子どもたちは、自分の野菜の生長を期待するとともに、活動意欲を高めていった。このあと、教えただいたことをもとに「マイ野菜パワーアップ作戦」として、さらに自分なりに工夫して栽培活動を続けていくことができた。

単元構想の中で、どの場面でゲストティーチャーとの学習を取り入れるかについては、十分に考えていかねばならない。本単元では、前時の話し合いで問題意識が高まり、専門家の話を聞きたいという気持ちが高まったところで取り入れたことが、効果的であった。また、子どもたちがどんなことを知りたいかとどんな思いでいるかについて、事前に打ち合わせておいたため、子どものニーズにあった学習ができたと考える。

④ ファミリーパークでのダイナミックな畑作体験

学校での野菜の栽培活動と並行して、富山市ファミリーパークでの自然体験・畑作体験（サツマイモ作り）を春、夏、秋と年3回行った。

春には、雨上がりのためぬかるんでいた畑で、裸足になりサツマイモの苗を植えた。直接足で触れる泥の感触。「あったかい」「ぬるぬるして気持ちいい」などと言いながら、苗を植えた。夏には、畑が大きな葉っぱと蔓で埋め尽くされていることに驚いた子どもたち。体全体を使って蔓を伸ばし、蔓返しをした。秋は、いよいよ収穫。楽しみにしていた芋掘りであったが、あいにくの雨。しかし、子どもたちは、スコップと手で、サツマイモを傷つけないように、丁寧に掘った。しかし、30センチ近くあるサツマイモは大きすぎて、なかなか掘れない。「手伝って!」と友達と声を掛け合い、協力しながら掘った。収穫したサツマイモをえさとして、ヤギにあげた。最初は怖がっていた子どももヤギが自分の手からサツマイモを食べてくれると大喜び。「かわいい!」とヤギの頭をなでていた。

このように、里山の自然を全身で感じられる体験活動をマイ野菜づくりと並行することで、植物の生長のたくましさ、土の感触、収穫の喜びなどを肌で感じながら、ダイナミックに自然とのかかわりを深めていくことができた。このような活動は、ファミリーパークの専門員の方や農家の専門家の方との連携によってできたものである。



＜サツマイモ苗植え＞



＜蔓返し・草取り＞



＜掘った芋をヤギに＞

(N 界)

(O 界)

<いもほりの感想カードより>

① 見通しをもって主体的に学んでいくための教師の支援

イ フェスティバルまでの見通しをもたせるため、スモールステップの予定ワークシートを利用し、毎回自己評価する。

アの支援により、子どもたちは進めたい方向がはっきりとし、願いに向けて、活動を進めていくことができた。イのスモールステップの予定ワークシートにより、今日の活動では、何をどこまでするかということがわかり、見通しをもってグループでの活動を進めていくことができた。休み時間にグループで集まって台本づくりをしたり、家で劇の小道具をつくってきたり、わからないことをもう一度図書室で調べてきたりするなど、主体的に活動する姿が見られた。また、自己評価したことにより、活動を振り返って、次の見通しをもっていくことができた。

子どもたちは、伝える相手が1年生ということを考えて、劇、ペープサート、紙芝居、大型絵本など、伝える方法をグループで話し合いながら決めていった。

A group of children are performing on a stage in a classroom. A teacher stands on the left, and a line of five children is in the center. A chalkboard with Japanese text is in the background.

＜アブラムシをやっつけるぞ＞

はっきりさせてグループをつくる
ことで、意見を出し合い協力し学びを高めていくことができた。

つたえよう！1年生へ
見つけたこと・そだてたこと・ふれあったこと

月・日	曜日	すること・よていひょう	(マーク)	ひとことかんそう
11 / 8	月	グループ・チームづくり		
9	火	どんなことをつたえるかをもうだんしてきめる	(1)	わいがかんどうをけたり おもしろいかなんかをしたり しつぷりあまのうけ
10	水			
11	木	下書き・書くことを考える じゅんぴ	(A)	水あめをたがのにおまどうやろ がをきろきろした。
12	金	下書きができたところから せいしよ	(B)	おきながそうこはを中山さん のわいあまのうけをまたとちうたり たてさんかんかい入れたあま。
13	土			
14	日			
15	月	せいしよ・じぶんのいうこと をおおえる	(C)	じぶんのいうことをしかり おほええました。
16	火	チームではびょうのれんし やう	(A)	グループでせられしめたあま。 それはグループでせられるかはかて 2分ちかりた。
17	水	グループではびょうのれん しやう	(B)	あたまけんフループのあまなり かてでせしあうすだったあま。
18	木	リハーサル	(C)	おきなとこをかんはってて じぶんかんかいはらなくちうと おもしろした。
19	金	グループでさいごの見面し	(D)	さいごのリハーサルはちうとど くましたけど、うまてました。 あしたにかんきります。
20	土	中おうちフェスティバル		

＜中央っ子フェスティバルにむけて＞

つたえよう！1年生へ
見つけたこと・そだてたこと・ふれあったこと

名前 こしはまなつめ

1 これまで学習してきたことから、あなたが一番1年生へ伝えたいことは、どのことですか？
 (1個つけた方がいいこと、2個につけた方がいいこと)

(☒) そでてよう！マイやさい (やさいをそでてくこと)

(☐) ファミリーパークできんぎょいもそでてくこととやわくわく園さんぽ

(☐) わくわく どんぐり 町たんけん ーここがおすすめー

2 一冊つたえたいと えもんだことについて
あなたは、1年生さんにどんなことをつたえたいですか？（くわしい書いてね）

わたしは、1年生さんにとんぱことをつたえたいですか？ (くちしく聞いてね)

つたに、はなをうんたにきかというはし、あ、い

わたしは、やさしいくきのながさをはかたり虫

ようにスプレーをかけたりました。でも、虫

→ 3月31日、その日を最後に、花がでるまで

[illegible]

↑ カクは元がしほ。そして化かちめがし

ぐんがが、やっとみことができました。

1 せの高さを(はか)つたり、虫かごのないように入つ(レ)て、
E かはたりして、(の)かりお(せ)わら(し)て、こ(と)を(し)月(は)に。

71 = 21:11 のとき



＜K 界の伝えたいことワークシ

△R元の恒元は1と2の2つ

＜K児の伝えたいことワークシート＞

③ 異学年交流での伝え合いの場「中央っ子フェスティバル」

2年生として、中央っ子フェスティバルに向けて大事にしてきたことは、「1年生にわかるように、はっきり、ゆっくり、目を合わせて伝えよう」ということだった。発表当日は、緊張しながらも1年生のことを考え、張り切って伝えようとする子どもたちの姿があった。発表を終えたあと、「楽しかった」と感じていた子どもが多く、しっかりと伝えられた満足感、自分たちの発表を聴いてもらえた喜び、やり遂げた成就感を味わっていた。

<発表を終えての感想より>

今日は、本番で緊張しました。今まで、紙芝居やクイズの練習をがんばってきました。今日は、その成果を出そうと、思い切ってやりました。ちょっとはずかしかったけど、1年生さんにわかりやすいようにゆっくりと言いました。喜んでクイズに答えてくれてうれしかったです。(H児)

今日は、大成功だったと思います。わたしは、友達とせりふを考えた、ペープサートを作って練習したり、いろいろなことを準備してきました。1年生さんがいっぱいいて、すごいきどきでしたが、島川のあめやさんのことをきちんと伝えられたと思います。(O児)

<1年生の感想カードより>

2年生の発表でクイズがありました。町探検のクイズで、答えられたのと答えられなかったのがあります。ちょっと難しかったけど、楽しかったです。野菜のクイズ入りの劇みたいなのもあって、かっこよかったです。(1年生F児)



<1年生に伝える子どもたち>

2年生は、3年生の「発見！発信！中央小たんけんたい」の発表を聞くことになっていた。伝える側から、聴く側になった。

子どもたちは、2年生の発表を自分たちでつくり上げたからこそ、3年生の発表を自分たちの発表と比べながら聴くことができた。3年生の発表では、「薬の作り方」や「りゅうの水こいの水の飲み比べ」など体験コーナーが多く取り入れられていた。子どもたちは、実際に体験させてもらうことで、実感できたことが多く、3年生の発表のよさに気付くことができた。

<3年生の発表を聞いて>

わたしは、3年生の発表を聞いて、すごいなと思いました。その中でも、水くらべが楽しかったです。りゅうの水、こいの水、竹の水は全部飲んだことはあったけど、飲み比べたことはなかったからです。こいの水は、あまいかんじがしました。竹の水はすっきりしていました。(S児)

3年生の発表はすごくて、おもしろかったです。わかるように工夫してありました。四ッ谷川の発表では、ぼくたちが魚釣りをして、出た番号のひみつの扉を開く仕組みでした。おもしろかったです。こいが群れをつくっているところを見たことがないので、見てみたいです。四ッ谷川へ行ってみたいくなりました。(N児)



<3年生の発表で水の飲み比べ>

このように、中央っ子フェスティバルで異学年交流したことによって、次のような成果があったと考える。

<発表し伝える側>

- ・ 自分たちの活動をまとめることによって、自分たちが取り組んできたことの成果を実感するとともに、お世話になった方への感謝の気持ちをもつことができた。
- ・ どんな内容をどのように伝えたらわかりやすいかを考え、相手意識をもって活動を進めていくことができた。相手の立場に立って考える“人にやさしい”心が育ってきたと言える。
- ・ 伝えることができた、しっかりと聴いてもらえたという成功体験が、満足感や成就感につながった。

<発表を聴く側>

- ・ 発表の仕方のよさに気付き、自分たちのこれからの発表に取り入れていきたいという意欲をもつことができた。
- ・ 次の学年でどんなことをするのかが分かり、活動意欲や見通しをもつことができた。

(瀬山 陽子)

第5学年 総合的な学習の時間

体験を通して、日本のお米と自分の食生活をつなげ、日本の食の未来について考えていこうとする子どもの育成

1 単元名 食の向こうに見える世界

2 単元の目標

- ・ 教科で学習したことや実際に体験したことを基にして、自分の食生活とつないで現在の食料生産についての課題をもつことができる。
- ・ 課題解決に向けて情報を収集し、様々な資料から多面的に考えたり、効果的に選択・活用して表現したりすることができる。
- ・ 食料生産と消費のあり方から国際協力や環境について考え、学んだことを生かして、自分にできることから行動することができる。

3 単元について

—— 児童の実態 ——

- ・ 好奇心が旺盛で、いろいろなことに興味をもって取り組もうとする子どもが多い。やや集中力・持続力に欠ける子もあり、意欲を喚起する手立てを講じる必要がある。
- ・ 本校区は都市部にあり、子どもたちの農業体験は必ずしも豊富ではない。また、日頃から好きな物を好きな時に食べることができる子どもたちは、食べ物について無頓着であったり、偏食気味であったりする。稲作体験を通して、一粒のお米が育ち、人の口に入るまでに様々な苦労があることを理解させ、食の大切さを認識させたい。
- ・ 4年生での学習から「環境」を意識する子どもが多い。人や地球にやさしい食のあり方を継続して考えさせていきたい。

—— 教材の特質 ——

- ・ 食料生産については、米作りに重点を置いて学習を進める。有機農家の方々の協力を得て、本物の田んぼと学校のミニ水田で体験したことを基に、生産者と消費者の両方の立場から食料生産の現状を考える。
- ・ 食調査をきっかけに日々の食生活を見直し、食料自給率や栄養のバランスなど様々な面からお米を食べることの価値と意味を考えさせていくことができる。
- ・ 現代の食生活では、外国からの輸入は、環境への影響や国際協調などの観点からも考える必要がある。プロジェクト型の学習活動を取り入れながら、友達や家庭、地域の人々と協同して課題を解決し、具体的に実践する態度を身につけさせたい。

—— 支援・指導の工夫 ——

【教科との関連】

- ・ 社会科、理科、家庭科などの学習内容と結びつけながら、日本の現状や実生活での問題解決につなげていく。長寿食である日本型の食生活を大切していくことが、食料自給率の向上につながっていくことに気づき、食（お米）に対する多様な価値や意味を考えていくようにする。また、国語科の学習を生かし、依頼状やお礼状の書き方や生活白書、ニュース番組作りなどいろいろな形での表現活動の場を設ける。

【体験活動の充実】

- ・ 校庭に作った昨年度の水田の土を入れ替え、無農薬・有機栽培を目指し、土づくりからこだわった。身近で稲の様子を観察したり、本物の田んぼ（飯田農場）での体験と比較したりしながら、農家の方々の苦労、努力に気付かせていく。水田のそばの畑では、自給率の低い大豆を2年生と一緒に栽培し、日本食と大豆の関係も考えていく。

【ゲストティーチャー・外部機関との連携】

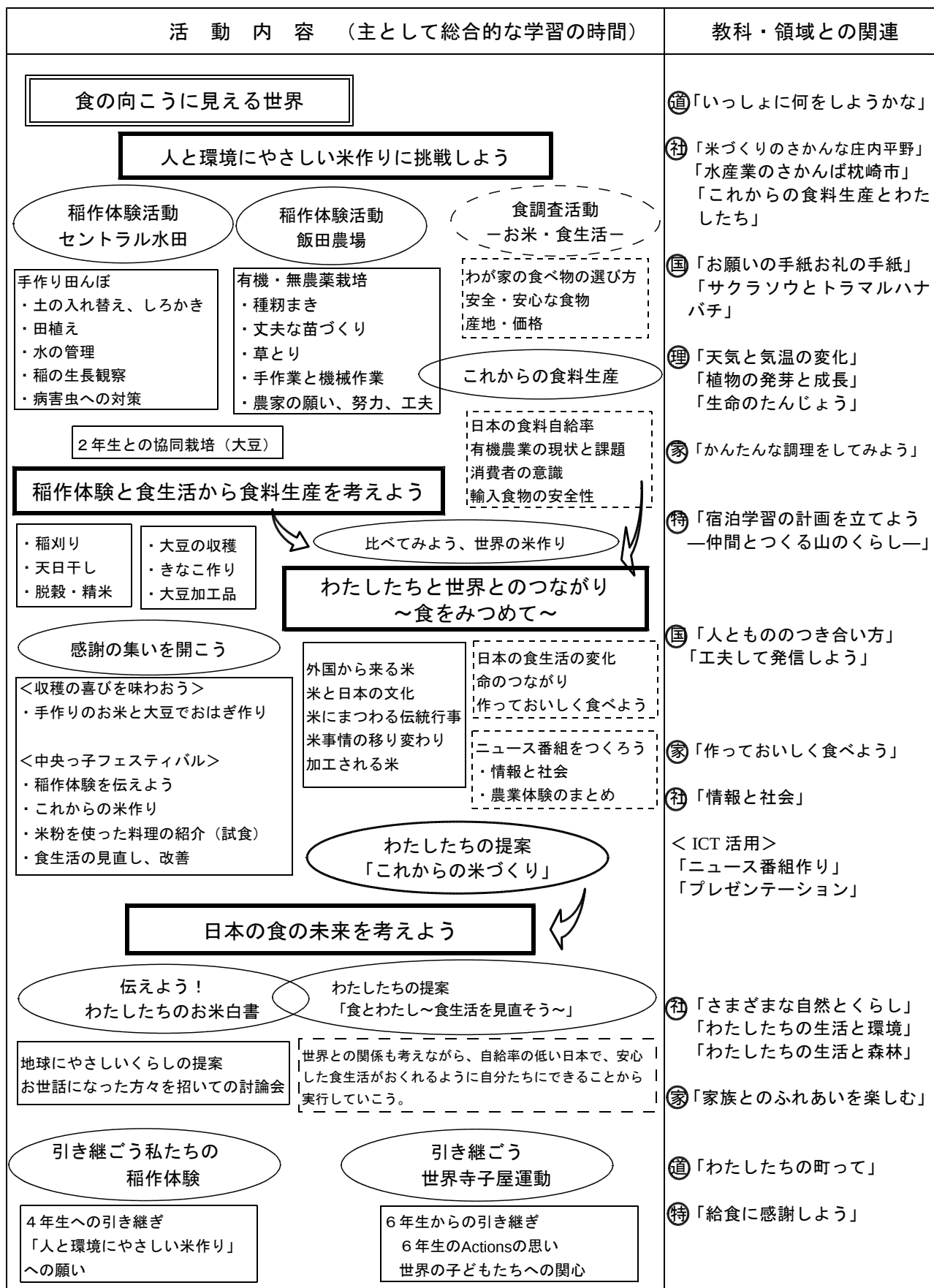
- ・ 栄養職員、調理員さんから食材や栄養面での専門的な話を聞かせてもらったり、JAや農家の方々の協力を得て稲作体験をしたり、農政事務所の方から行政側での工夫や対策を教えていただいたりしながら、自らの食生活を見直し、これからの日本の食のあり方を真剣に考えようという意欲を高め、自分たちにできることから実践へとつなげていきたい。

【かわり合い・伝え合う学習環境の工夫】

- ・ 体験したことを「自分の言葉」で伝えることを大切にしていく。マイ（※）ライフ通信の発行や食を考えるコーナーの設置など調べて考えたことを書いて伝え合う場や、友達や専門家の意見を聞き、見方や考え方を広げる話し合いの場を適宜設け、各自の学びを深めたい。

4 学習構想図

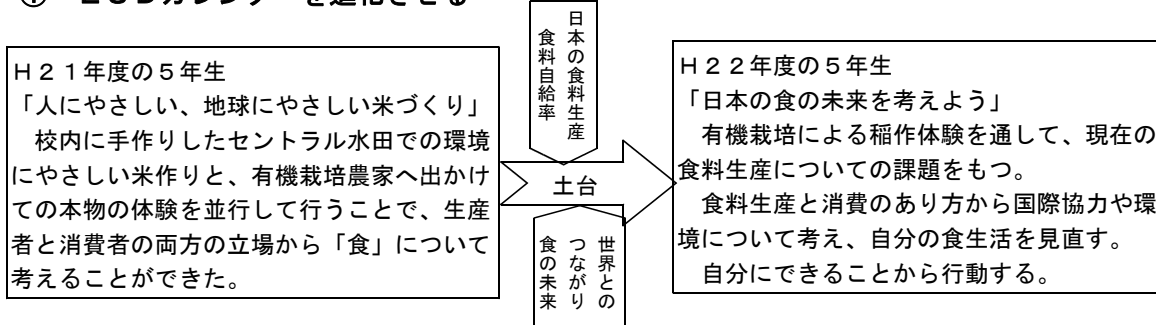
「食の向こうに見える世界」 学習構想



5 学習活動の実際と考察

(1) 子どもの思考の筋道を丁寧に描いて単元を構想する

① ESDカレンダーを進化させる



昨年度の終わりに、現6年生から「セントラル水田」を引き継ぎ、土づくりの大切さ、環境に配慮した有機栽培の大変さと必要性を伝授された子どもたちは、自分たちの手で「安全・安心でおいしいお米をつくりたい」という願いをもって進級した。米作りについてはある程度見通しをもつことができていたので、カレンダーを修正し、ゴールを「日本の食の未来を考える」として、食全体として考え実践していくように設定した。農作業の大変さを肌で感じ、社会科で食料生産の現状を学習した子どもたちは「日本の食生活は、このままでいいのだろうか。」という課題をもった。

そこで、給食や家庭での食事といった身近な食生活から、食を通じた世界のつながりまで子どもの問題意識が連続していくように、次のような手立てを講じた。

ア 家庭との連携を密にする

学年だより、マイライフ通信、HPを通しての発信、食生活調べや親子で調理実習

イ 人材を広く繰り返し活用する

- ・ 有機栽培農家の飯田さんを中心としたMOA自然農法文化事業団との交流
- ・ JA山室支店の方からのアドバイス
- ・ 調理員であり、兼業農家で給食に出る米粉パンの原料生産にもかかわっておられる野口さん、栄養職員の須郷さんをゲストティーチャーとして招いての授業
- ・ 北陸農政局の出前授業「フードアクションニッポン」

以上の方々とくり返ししかかわることのできる場を設定

ウ 図書館司書との連携

必要な情報を収集し活用できるように、コーナーを設けて本や資料を整備

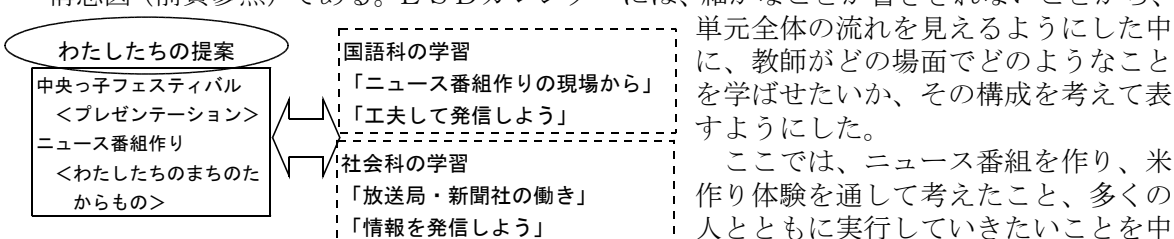
エ メディアの活用

様々な視点から情報を分析し、生き方を学ぶ、テレビ番組や新聞の有効活用

これらの支援によって、子どもたちは探究的な学びへの意欲を高め、多面的なものの見方や考え方をするようになった。(子どもの具体的な姿については以下の項で述べる。)

② 教科等の関連を図る

総合的な学習の時間と各教科等とは、互いに補い合い、支え合う関係にあり、教育課程全体の中で相乗効果を発揮する。その位置づけを明らかにする上で有効だったのが、学習構想図(前頁参照)である。ESDカレンダーには、細かなことが書ききれないことから、



心に発信する場を設定した。そして、制作した番組を日本ユネスコ協会連盟主催の「私のまちのたからものコンテスト」に応募することにした。(ユネスコスクールとして、3年生以上で各学年の実態に合わせて参加することにした。自分たちで撮ったデジタル写真に文字やナレーションを入れ、1分半のスライドショーの形でまとめる作品づくりである。)

社会見学で、報道の工夫と努力、影響力の大きさを学習し、情報を正しく、分かりやすく伝えるための注意点を話合った。国語の教材からは、自分の考えを伝えるために、集めた情報の中から必要な事柄を選んでニュース原稿を書くこと、聞き手に対して、自分の考えを明確に伝えるために効果的な文章の組み立てを考えることを学習した。原稿作りでは、新聞記事の書き方を参考にして、リード文・事実と意見の書き分けを大切に。編集では、映像の効果と話し方(速さ、大きさ、間のとり方)を工夫した。3～4人の小グループで一作品を作り、互いに見合い、アドバイスをし合いながら意欲的に制作に取り組んでいた。



＜番組作りの絵コンテの一部＞

集めた情報を整理したり、分析したりして自分の考えとしてまとめ、表現していく中において、各教科等の知識や技能等を主体的にくり返し活用していく子どもの姿が見られた。また、総合的な学習の時間で行った体験活動を生かして、国語科や社会科の学習素材とすることで、学習に深まりと広がりを生み出すことができた。統合化を図ることで、学習を効率的に進めることもできた。

③ 言語活動の充実を図る

思考力、判断力、表現力等の基盤となるものは、広い意味での言語であり、その中心となるのは、言語活動である。そこで、国語科で学習した「記録、要約、説明、論述」という学習方法を他教科等で意図的、計画的に活用することが大切だと考えた。以下の2点を重点化して取り組んできた。

ア 自分の考えを確かにするためのノートやワークシート

＜M児の自由記述式ワークシート＞

安全・安心なお米づくりに挑戦しよう

米の自給率 (生産量)

5月28日(金) 5年 / 組 名前

米の、2008年度の自給率は、95%です。

100% 作れるのになぜ100%じゃないの?

※せんべいや、酒の一部、工業用のりなど、ご飯以外のものに外国産の米が使われています。そのため、米の自給率は、100%になりません。

50国 50% 50% 100% 50% 50% 45%

ご飯 飯以外で、せんべいや、酒のように米が使われているもの

日本でせんべいや、工業用のりにも、国産のものを使わないの?

日本は、食糧物は輸入にたよっていて、自給率は41%。だけど、全体で見ると、食べ物や物に、輸入のものが多くあります。なので、外国は日本に、輸出が不利な、オレ(私)の国の物も輸入してほしい、と言ってくるから、減反せずにすむには、米も、と食べる、食べ残しをけい。小麦は輸入している、米は、あまのいので、パンを、米で(白米)米パン

わたしの考え

＜S児の観点を明確にしたワークシート＞

稲作体験や食についての調べ活動をしたところと今の自分を比べてみよう

今日の話し合いから、思ったこと・考えたことを書きましょう。

11月12日 5年 / 組 名前

わたしは昔、調べ活動があまり好きじゃなくて、面とくさいな~と思っていたけど、お米について学習してからはお米に興味をもって、前より、調べるようになりました。また、野上さんが発表したことには、大がかりで、世界にも食べ物に、こまっている人が約10億2千万人いて、日本の人口は約1億2千万人いて日本人の10倍もいて、わたしたちは毎日3食食べられるだけで、幸せななと思いました。

Good

自己評価

<話す> 理由や例をあげて話す (S) A B C

<聞く> 自分の考えと比べながら聞く (S) A B C

<考える> 自分の意見と友達の見解を比べたり、つないだりしながら考える (S) A B C

どの授業や活動においても、自分の考えをもったり、論理的に整理したりするために、書く活動に重点を置いてきた。

M児のワークシートからは、矢印や囲み、記号など、自分なりに工夫して考えを書き留め、整理している様子がうかがえる。M児は、収集した情報を種類ごとに分類したり、細分化して因果関係を導き出したり、批判的・複眼的な視点で分析したりするようになってき

た。2人の様子から、書いて表すことによって、「考える」ことがより意識され、自分の考えが明確になっていくことが見えてきた。

また、ふり返りの場を大切に、必ず書く活動を取り入れた。S児のワークシートからは、友達の意見に対する思いや話し合いによって気づいた新たな視点が書き留められている。授業のねらいによって、評価の観点をあらかじめ記載したワークシートを活用すること

今日の話し合いをふり返ると、世界で約10億人もの人が食べることに困っているの、ぼくたちがご飯を食べていられるのは奇跡なんだと思いました。また、農家のプロの石井さんの一言「苦労の数だけ人生は実る」ということがわかって、その農家を助けるのが消費者だから、お米は大切、これからももっとお米を食べようということを4年生に伝えたいです。(R児)

もある。全体で話し合いをする時間に使用することが多く、自己評価の観点もはっきりしているので、教師も子どもも意識して授業に臨むことによって、ふり返りも明確になる。

S児と同じグループのR児は、左のように書き留めた。世界の現状と今の自分を比較して考えたり、消費者である自分と生産者をつないだりしながら考える姿がみられた。

イ 小グループでの話し合い活動

「3人寄れば文殊の知恵、6人寄れば真珠の知恵」子どもたちが考えた話し合いでの合い言葉である。

45分の授業の中で全員が発言することは難しいが、小グループでの話し合いを5分ほどつと、それは可能である。3人だと特に進行役を決めなくても、気軽に話し始めていた。意見が分かれた場合も、いずれかの意見に従うのではなく、それぞれのよさを考えたり、お互いの違いから論点を明確にしていったりする姿も見られるようになった。短時間での話し合いは、結論を先に話したりすることも大切になる。国語科での「話す」「聞く」の学習が生かされ、伝えたいことを要約して話したり、相手の話を聞きながらメモを取ったりすることもできるようになってきた。

日々の生活班は、6人編成になっている。3人ずつに分かれて話し合ったことを班の中でまとめたり、よりよいものに高めていったりする中で、互いの価値観に触れ、ものの見方や考え方を多面的にしたり、追究の意欲を高めたりしていた。また、自分や仲間の成長を確かめ合う時間ともなり、そこで生まれた「真珠の知恵」は、みんなの共有の財産となり、学んだことを自分の生き方にも生かしていこうとする姿につながっていった。



<総合でのふり返りの一場面>

(2) 協同的に学び合う場を工夫する

① 2年生と一緒に取り組んだ大豆栽培

本校では2年生が生活科で野菜を育てている。一人一鉢を並べるビオトープの一角に5年生が米を育てるセントラル水田がある。2年生のミニトマトを育てるための畝づくりを手伝うことをきっかけに、子どもたちは「自給率の低い大豆と一緒に育てないか」と2年生に呼びかけた。「大豆をきなこにしておはぎを作りたい」という手作りのこだわりも伝えた。理科の実験を兼ねて発芽させた大豆を2年生と一緒に植え替えた。朝の会で日直が稲の様子を報告していたとき、こんなエピソードが語られた。



<2年生と一緒に大豆の世話をする5年生>

今朝、「いつもありがとう」と2年生に声をかけたら「これは、すごい水なんだよ。虫さんから大豆を守ってくれるし、栄養にもなるんだって。朝、お母さんからお米をといた水をもらってきたんだよ。」と言われ、びっくりしました。米のとぎ汁のよさにもう気づいていました。すごいなと思います。2年生のがんばりにこたえられるよう、ちゃんと一緒におはぎ作りができるように、お米も大豆もしっかり育てていかなくてはいけないと思いました。(K児)

猛暑の中も青々としげった大豆だったが、葉にばかり栄養がいったのか、実がなってもなかなか中の豆が大きくなり、子どもたちは不安になった。MOA 自然農法の竹中さんに見ていただいたところ、土に栄養がありすぎたのが原因だと分かった。昨年度のセントラル水田の土を畑に活用したので、稲わらや米ぬかが自然の肥料として土を肥やしていたことも分かった。子どもたちは、これまでの理科の学習での体験と違い、肥料が成長の逆

効果になる植物もあることにとても驚いていた。また、思うように収穫できなかったことで、野菜ではなく、稲作中心の兼業農家が多い現状も少しは理解することができた。5年生手作りのおはぎのプレゼント先は、もちろん2年生。うれしそうにほおぼる姿に大満足の子どもたちであった。ともに心を寄せて成長を見守る中に「人にやさしい 自然にやさしい 地球にやさしい中央っ子」の姿を見ることができた。

② 力を合わせたり、交流したりして協同的に学んだ中央っ子フェスティバル

去年は、自分たちの手で「エコフェスティバル in 中央」を開き、ポスターセッションに挑戦した子どもたち。人に伝えることの難しさを学んだ分、やり遂げた達成感も味わっている。今年は、伝える相手が4年生と決まっている中で表現を工夫していくため、相手意識、目的意識もはっきりとしていて1週間という短い期間で企画・表現・場の設営などを主体的に進めることができた。経験が表現のステップアップへとつながっていた。「何をどのような形で見せたら関心をもってもらえるか」「どんな構成で話をすれば短時間で理解してもらえるか」などグループで真剣に話し合われた。これまでの体験や調べ活動の整理、分析を行い、4年生に伝えるために自分の考えとしてまとめる活動を通して、一人一人の考えが明らかになったり、課題が一層鮮明になったり、新たな課題が生まれたりしてきた。これは学習として質的に高まることであり、深まりのある探究活動を実現することになると考える。



＜プレゼンテーションする5年生＞



＜なわな体験コーナー＞

＜4年生H児からの感想＞

ぼくは、5年生の発表を見てすごいなと思いました。なわを結ぶのを見せたり、体験のお知らせをしたり、ぼくたちが興味をもちそうなことをして、すごかったからです。5年生はとなりのクラスに聞こえるくらい大きな声で言って、せりふも覚えていて、やったことをパソコンを使って見せたり、実際にやってみたりしてくれて、すごいなと思いました。

＜中央っ子フェスティバル直後の感想から＞

ぼくは、今まで練習してきた成果が出たと思いました。なぜなら、4年生のみなさんが、ぼくたちの発表を静かに真剣に聞いてくれていたからです。少しかんでしまった場もあったけど、大きな声で発表しました。興味をもって聞いてくれて「そうなんだ」「すごい」「おもしろい」などたくさんうれしい言葉も聞こえてきました。この発表で、4年生にセントラル水田を引き継いでほしい、5年生が体験した米作りの大変なこと、楽しいこと、やった人にしか味わえないことをぜひ味わってもらいたいという気持ちになりました。稲は余すことなく使えるエコ食材です。来年の参考にしてくれたら、もっとうれしいです。（N児）

今日の中央っ子フェスティバルは、自分ではよく出来たと思います。言葉もつかえずに堂々と言え、何よりも4年生が「これ知ってる」「そうなんだ」とうなずいてくれたので良かったと思いました。今日の発表で、改めて米の大切さ、貴重さが分かったので、これからも伝えていきたいです。自分だけでなく、グループの仲間もみんな堂々と話していたので、今回は「大成功」だと思います。いい体験ができました。また、6年生の発表を聞いて、すごいなと思いました。ぼくたちのように、ただ事実を言うのではなく、一人一人が自分の意見をもって、堂々と話していたからです。すごく聞き取りやすかったです。6年生の発表から学んだ事は、来年生かしていきたいです。（S児）

発信に向けて表現をまとめる中で、共に学習を進めている仲間や食に携わる人々の考えや願いに触れることが、自分自身の考えや取り組みを見直していく契機になった。N児は、自然と共存していくことの大切さを体験し、昔の人の知恵に触れ、稲をエコ食材と表現した。またN児のように、相手の4年生の反応から自分をふり返り、達成感を味わった子が多かった。4年生からの感想にもそれがうかがえる。即座の他者評価が、子どもたちの自信につながった。これは、学校全体で「話す」「聞く」を柱にかかわり合いに力を入れて指導してきた成果の現れでもあると考える。また、S児のように、発表することで、これまでの情報を再構成し、自分自身の考えがより確かなものとなった。友達のよさを認め合ったりする姿も多くが見られた。6年生の発表と比べてみることで、新たな課題を自覚することにもなった。

他者とかがわり、協同的に学び合う場を工夫して設定することは、一人一人の子どもの学びの質を高めていくことにつながる。

（深井美和）

3 中央っ子フェスティバルの実践

E S Dを実践するに当たっては、テーマ「自然にやさしい 人にやさしい 地球にやさしい 中央っ子」のもと、各教科や領域、学校行事との関連を図りながら、生活科や総合的な学習の時間を中心に各学年特色ある取り組みを行っている。

中央っ子フェスティバルは、その成果を他の学年に見てもらう活動報告会である。当日は、ポスターの掲示やプレゼンテーション、クイズ・ゲームなどの遊び、劇や紙芝居など多様な方法で発表したり、体験したりする活動に取り組んだ。

（1年生）「なかよし いっぱい！ ー秋フェスティバル 6年生を招待しようー」

四季を通じて同じ公園に足を運び、季節を体で感じ、自然とふれ合ったり、身近な人たちとの交流活動を行ったりして、「なかよし」を広げ、深めてきた。

校区にある公園で自然を観察したり、木の実や木の葉などを使って遊びの道具を作ったり、それを使って遊んだりしながら、自然の良さを体験的に学ぶことができた。また、友達と「遊びのコーナーづくり」の活動に取り組みながら人とかわり合う力を伸ばすことができた。

さらに、日頃お世話になっている6年生を遊びのコーナーに招待し喜んでもらおうと、友達と協力して準備をしたり、説明の練習を行ったりし、その成果をのびのび発揮していた。



落ち葉のドレスでダンス

（2年生）「見つけよう 育てよう ふれ合おう ー伝えよう1年生へー」

野菜やザリガニをじっくり育てたり、ファミリーパークの農業体験を通して自然とふれ合ったりしながら、命を大切にする学習に取り組んだ。

子どもたちは一人一鉢の野菜に愛情を注いで育てたり、富山市ファミリーパークでの農業体験をしたりした。野菜の種類や大きさがそれぞれ違っていても、みんなの野菜が元気に育ってほしいという願い、自分たちになりて工夫や努力したという思いを共有していた。また、伝える相手が1年生であることから、劇、ペープサート、紙芝居、大型絵本などの発表方法をグループごとに考えた。相手の立場を意識し、相手に応じてかわる力を高めていった。



野菜づくりクイズ

（3年生）「発見！発信！中央小探検隊 ー伝えよう ふるさとのたからものー」

地域を流れるいたち川やお地藏さん、校区の老舗など、それぞれが心を寄せた場所に何度も出かけて見学や取材を行い、地域のよさを発見していった。

町探検の学習を行っている2年生に発表することから、事実だけではなく、「人のやさしさ、校区で作られた物の魅力 安らぎや癒しのある場」など、校区を探検し、調べたことを語り合う中で、感じ合った思いも大切にしたいと取り組んでいた。また、自分たちの思いを分かりやすく伝えようとクイズやゲーム、体験コーナーなど発表方法を工夫する姿があった。



体験コーナーで丸薬づくり

（４年生）「レッツゴー！いたち川サポーター ―いたち川のよさを伝えよう―」

いたち川の調査活動や美化活動、また地球温暖化防止のエコ活動に取り組んだ。「もったいない」を合い言葉に、いろいろな場でエコ活動と呼びかけていった。

国語科の「四年生から発信しよう」の学習を生かし、いたち川の自然や歴史からみてきたいち川と人々のかかわりについて、自分なりに主張したいことを新聞づくりや劇等で表現していった。伝えたい内容や思いが、３年生に届くようにインパクトのある写真を選んだり、見出しの工夫をしたりした新聞（パネル）を用いながら熱心に説明する４年生の子どもたちであった。



いたち川の魅力を発表

（５年生）「食の向こうに見える世界 ―米作り体験を通して―」

自分たちの手で水田を作り、環境にやさしい米作りに取り組んできた。有機栽培農家での体験を通して、消費者・生産者両方の立場から「食」について考えを深めてきた。

発表を終えた５年生が「４年生は静かに真剣に聞いてくれたのでうれしかったです。私はこの発表で、５年生にセントラル水田を引き継いでほしい、私たち５年生が体験した米作りの大変なことや楽しいこと、やった人にしか味わえないことをぜひ味わってもらいたいという気持ちになりました」と感想を述べていた。



食生活を見直そう

（６年生）「Actions, not Words ―自分にできることから始めよう―」

世界の子どもたちのために、今自分にできることを考えてプロジェクトを立ち上げ、自分の生活を見直しながらかき損じはがきの回収の呼びかけや募金活動に取り組んできた。

６年生は５年生に世界の子どもたちの現状を伝えようとコンピュータを活用して発表原稿を作り、練習を重ねた。当日は、一人一人が調べて分かった事実や体験をもとに、自分の思いや考えを堂々と発表した。その発表を聞いている５年生の目は、とても真剣だった。

また、６年生は１年生の「なかよしいっぱい」の活動を通して交流した。「このゲーム、楽しいよ」と１年生に優しく声をかけたり、落ち葉のドレスを着て一緒にダンスを楽しんだり、とてもほほえましい姿がたくさん見られた。



子どもたちの現状を伝えよう

どの学年の発表からも、体験を通して感じたことや思ったことを分かりやすく伝えようと、友達と相談しながら創意工夫を重ねてきたことがしっかりと伝わってきた。

このフェスティバルを通して、子どもたちは自分たちが取り組んできたことに自信を深め、次年度への期待や意欲を膨らませることができた。まだ、歩み始めたばかりだが、これからも、全員が楽しさや喜びを実感できるＥＳＤの取り組みを続けていきたい。